

# 幽玄

——仏教との關聯に於いて——

井 手 恒 雄

一

普通に幽玄と言へば、何か宗教的なものだと考えられている。

幽玄なるものが問題になるのは、平安末期から鎌倉・室町へかけてのことであるが、当時の社会を特徴づけるものは仏教の一大流行であつた。幽玄なるものはその環境の下で、日本人の美的感情が極度に深化せしめられたものであるといふのである。人によつては、これを宗教的沈潜という語であらわそうとする向きもある。

本稿の目的は、幽玄なるものの本質が、宗教的であるよりむしろ反対に、非宗教的であると思われるふしのある事を、明らかにする所にある。一口に幽玄なるものと言つても、それはいろいろに解釈される。幽玄なるものの正体を最終的に明らかにすることは、別の機会に譲り、こゝではたゞ、それが宗教的などと言われねばならぬものではなく、事實は案外非宗教的なものであることを、少くともそう思われるふしのあることを、証拠立ててみたい

と思ふのである。本稿は、いわば数首の和歌の評釈の、いささか趣を異にするものの列挙にすぎぬ感を、人に与えるかも知れない。筆者としては、いわゆる幽玄に関する論議が、まさしく一箇の文芸論である為には、文芸の表現のデリカシーに迫る底のものでなければならぬと考え、殊さら、注意すべき幾つかの作品の味讀に、意を用いたつもりである。

## 二

心なき身にもあはれは知られけり 鴨立つ沢の秋の夕暮

これは、新古今・秋上に收められた西行の歌である。俊成から「鴨立つ沢のといへる、心幽玄に、姿及び難し。」<sup>註一</sup>と讃えられたもので、凡そ幽玄について語るほどの人で、知らぬ人は無い有名な作品である。一体いわゆる幽玄に関する論議は、それが一箇の文芸論である限り、幽玄の語義の探索や、幽玄論の論にとどまることなく、このような作品の一つ一つについて、その幽玄であ

る所以が論ぜられるのでなければならぬと思うが、このような作品の意味のほんとうのところは、これ迄正しく理解されて来たであろうか。この西行の一首は幽玄なる歌の標本とされているが、その幽玄である所以は、従来常識的に考えられて来たような所でよいのであろうか。

『西行法師名歌評釈』（尾山篤二郎）に、「心なきは無風流など云ふ程のことだが、彼自身心なしと感じてはゐない筈だから、事實は『心なき人も哀れを知りぬべし』とあるべきであらう」というが、これは誤解であらう。どこが誤解であるかというに、「心なき身」を「無風流な身」と解した所が大きな誤解である。普通にはそう解釈されがちである。つまり風流の大家である西行が、自分で、自分のような物のわからない男にも、これは成程身につまされてあわれと思わせられる光景であることよと、極端にへり下つた歌だといふのである。『西行法師名歌評釈』の著者は、さすがにそれでは満足出来ずに、「彼自身心なしと感じてはゐない筈だから」と言い、結局西行の作とは似ても似つかぬ「心なき人も哀れを知りぬべし」などという試作を敢えてしたりなどした。

『新古今和歌集詳解』（塩井正男）は「〔意解〕鳴の鳴きて飛び立つ沢辺の秋の夕ぐれ物のさびしきけしきよ、常は、あはれともかなしとも思ふ心は捨て、なき我が身にも、なほ身にしてみても、あはれにおほゆるワイといふ事にて、鳴立つ沢の秋の夕ぐれの淋しさは、無心の境に入り得たる法師でも、なほ身にしてみても、あはれに、心をいたましむるものありといふ意にて、つまり、その秋の夕暮のさびしさの、一方ならぬを感じて詠めるなり云々」

と言ひ、『新古今和歌集評釈』（窪田空穂）は、「〔語釈〕○心なき身。出家の身の意でいつてゐる。出家するのは世間の煩惱から離れる、即ち心なき身となるのが本旨だからである。○身にもあはれは。『あはれ』は、しみじみと身にしみる意。〔釈〕出家の心なき身にも、身にしみる趣が感ぜられることである。鳴の舞ひ立つ田沢の、この、秋の夕暮は。」と言ふ。この両者は何れも解釈としては正しい。「心なき身」は出家の身である。それは此の歌の生命であるが、それがしばしば誤られがちである。では詳解も評釈も、更に進んで此の歌の哀れさの、ほんとうの所を味わひ得ているかというに、そうでないと思われるふしがある。

詳解に曰く、「詞すなほに、感深く、景うかびて、誠に歌も亦心なき人をも動かしたつべきものありとやいはむ。」と。この「心なき人をも動かしたつべき」とはどういう意味であらうか。この場合の「心なき人」は、西行名歌評釈の「心なき人も哀れを知りぬべし」に似たものであろうか。若しそうなら作者の訴えんとする所を伝えるものとはいふ難いと思うが。評釈に曰く、「上三句は、下二句の説明で、中心は下二句である。しかしその下二句は、上三句の説明を要するほど特殊な、言ひかへると實際的なものである。秋の夕暮、田沢の中から、一羽の鳴が静寂を動かして舞ひ立つた。これはあはれな光景とは知られるが、しかし『心なき身にもあはれは知られけり』と、歎息を持つていふ程のあはれを感じたのは、作者のあはれに對しての特殊の敏感が伴つてゐるものと見なくてはならない。その点は窺ひ難いものである。上三句が、さうした必要を持つたものであるところからは、これを説明とも

いひ切れない。作者と自然と一つになつたところの、その作者を描写したものと取れるからである。下二句は、さびしさの具象化である一首として、力のある、直線的な続きを持つたもので、強い感を現してゐる。」と。果してそうであらうか。問題は、「作者のあはれに對しての特殊の敏感」である。評釈の著書は、この歌の下句を一首の主眼と認めた上で、その光景が心なき身にも「あはれ」は知られたと歎息される程に感ぜられたのは、西行その人の「あはれ」に對しての特殊の敏感が伴つていゝとし、その点が窺い難いと言うが、それが窺い難いといふのであれば、この歌の生命は生かされないのではないか。

私見に従えば、この一首の内容の深さは、作者が出家の身であるといふ事實に重きを置いて、味われねばならぬ。作者の立場として、いわゆる自然美なるものには、無頓着でなければならぬ。評釈にも言う通り、出家するといふのは世間の煩惱から離れることであり、心なき身となることであるからである。鴨立つ沢の秋の夕暮といふのは、その立場からさすがあわれと感ぜられた所のものである。それは評釈の言うように、秋の夕暮に田沢の中から一羽の鴨が静寂を動かして舞い立つ、というあわれな光景が先ず有つて、それが作者に於いては殊さら敏感に感ぜられた、というものではない。それは作者の、それ自体があわれな立場から眺められることによつて、始めて成立した所の、特殊の静寂境なのである。

此の一首の中で特に効果的な語は何であるかと言へば、それは「心なき身にも」の「も」であると思う。こゝに身を捨て果てた

一人の出家者がある。彼は、出家者であるからには仏道を大事にし、官能に迫る一切のものを断乎として斥けようと決意してゐる。又實際彼としては、いわゆる無心の境に入り得たと信じてゐる。その彼が、出家の身にも「あはれ」は感ぜられたと言う。出家の身にもさすがに、という所が此の歌の眼目である。此の歌の生命は、出家者の心の哀れさにある。それが、「も」の一語によつて最もよく表現されていると思う。

一体西行の歌の比類なき哀感が何に由来するかというに、それはこの歌に、その語が用いられている所の、「心なき身」の自覚であると思う。彼は「心なき身」即ち出家者の自覚を心中に持ちながら、一方ではその天賦の詩情を和歌に托した。和歌なるものは、今日常識的に考えられる所と異なつて、本来は、人の眞に止むを得ざる情慾の表現なのである。西行で言えば、出家者の身として、修行が辛いとか、話相手が欲しいとか、肉親が恋しいとか、言えたものではない。そこを例えば「わりなしや凍るかけひの水ゆゑに思ひすてし春の待たる」と言い、「とめ来かし梅さかりなるわが宿をうときも人は折にこそよれ」と言い、「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」と言うのである。彼の歌が人をあわれと感ぜしめたといふのは、出家者に嚴格な修行の掟が課せられていた當時とはいへ、捨てようとして捨てることの出来ぬ人情の眞実が、そのすぐれた歌の一つ一つに籠められていたからのことであつたと思う。死灰枯木となつて仏道に精進すべき人とはいへ、その心情の哀れなことよ、と人をして感歎せしめるに足るものが、そのいかにも自然的な表現を

通じて、如実にうかがわれたからであつたと思う。

さて西行は、「心なき身」にも「あはれ」が感ぜられたという。この「あはれ」は例の、源氏物語は「物のあはれ」を写すものである、と言われる場合の「物のあはれ」と同一のものなのであろうか。よく幽玄は「物のあはれ」の展開したものであると言われる。幽玄と「物のあはれ」との関係は、更に綿密に検討せられねばならぬと思う。が此の場合しばらく、幽玄は「物のあはれ」の或る中世的な在り方だとする普通の見解に従つて置く。西行の感じた「あはれ」は、少くとも語としては王朝以来の「あはれ」であろう。若し然らば、源氏物語が「物のあはれ」を写すものであるというのは、それは仏道をすゝめるものではないということである、言いかえれば、「物のあはれ」は仏道と趣きを異にする別の何ものである、ということであるが、<sup>註二</sup>その「物のあはれ」に通じる西行の「あはれ」が、何か宗教的なものであるというのはどうであらうか。幽玄は「物のあはれ」乃至「あはれ」そのものではない。然し心なき身にも「あはれ」は知られたという「鴨立つ沢」の歌が幽玄と評されるように、それはそういうものの或る表現なのである。そういうものが表現された或る風体である。それはそう容易に宗教的とは言えないと思う。一体幽玄といえば、落着いた深みのある美しさ、という風に考えられている。それはそうである。然しそれがいわば宗教的沈潜というようなものであるかというに、一概にそうは言えないものがあるかと思う。私見に従えば、それは後に結論する通り、逆に非宗教的であるところの何ものであるかと思うのであるが。先

ずいて西行の「鴨立つ沢」の一首について言えば、一首の生命であるところの物あわれなる感情が、一見作者が出家者であり、いわば宗教的であることに由来するもののように見えて、実は本質的に非宗教的性格のものであり、いわば宗教の世界に入らんとするに当り、捨てんとして而も捨て得ざる底のものなのであることは、事実として動かしがたいと思うのである。

註一 御裳濯河歌合（岩波文庫・峯岸義秋編「歌合集」四〇五頁）

註二 平安朝文藝の最高理念と考えられる「物のあはれ」なるものは、もとく宜長によつてはじめていわば學術用語として用いられたものである。そして宜長によるかぎりそれは非佛教的・非儒教的なるものの謂である。

### 三

今はわれ吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかり  
けれ

これは俊成の作で、新古今・雜上に「世を遁れて後百首歌よみ侍りけるに花の歌とて」という詞書と共に收められている。俊成自身がこの一首を幽玄なるものと考えたり、口に出して言つたりしたという証拠はない。何となくこういう歌が幽玄と称すべきものかと感ぜられるものであるが、これを幽玄と言ひ切ることは、現代人の恣意として慎まねばならないであらう。然し、幽玄体の主唱者と目せられる俊成にこういふ作品があるというので、問題になる歌であるかと思うのである。

評釈に曰く、「〔釈〕今は、以前とちがつて我れ、憧れのみしてゐた吉野山の櫻を、直ちに宿のものとして見るべき身ではある。〔評〕遁世すると、最初に思ふことは、仏道の修行ではなくて、身の自由になつたこと、それと共に、憧れとしてゐた吉野山の櫻を、宿のものとして見られるといふ喜びである。唯美主義者の心をあらはしたものである。予ての憧れであつたことは、余情としてゐる。又、当然『庵』といふべきところを、『宿』と言ひかへてゐるのも、意識してのものと取れる。〔評又〕詳解は『遁世の心哀れにこもりたり』と評してゐる。遁世の心も見えず、その哀れもなく、反対に喜びの心を見せてゐるものである。』と。暫くこういう説の検討を通じて、俊成という人の歌人としての在り方を見、幽玄の問題に及びたい。

評釈によれば、作者は今こゝに遁世する身であるが、吉野山の櫻は美の代表として永年憧れていたところのものであり、彼としては、遁世して自由の身となつたので、今やその永年の憧れの的である吉野山の櫻を、わがものとして賞美することが出来ると、歓喜しているという。果してそうであろうか。此の人の説の誤りの主なるものは、この種の歌人達の自然美に対する態度への無理解であると思う。一首の和歌を解釈するにも、一世の歌論について考察するにも、いわゆる基礎知識が必要であるが、当時の遁世者の自然観なるものは、その最も重要なものであると思う。

詞書に「世を遁れて」とあるから、俊成はいわゆる遁世者の一人であつた。遁世者である以上、前の西行の場合がそうであつたように、自然美に愛着することは、許されぬ筈である。簡単に、

彼は唯美主義者であり、今や自由の身になつて櫻花を鑑賞することとに歓喜を感じていた、などと言へる筈はない。実際当時の遁世者は、あらゆる官能的なるものに眼と心とをふさぐうとして、懸命であつた。しばらく実例について、その間の事情を知る必要があると思う。

色香をば思ひも入れず梅の花常ならぬ世によそへてぞ  
見る

これは新古今・雑上に「梅の花を見給ひて」と題して收められた花山院御製である。一首の意は詳解に「梅の花に対して、我れは、其の花の色や香は、心にとめず、唯無常の人世を聯想するといふ事にて、眞実俗界の煩惱を厭離せられたる我が出家後の心を、梅花に対していひ給へるものなり。殊勝なる道心尊き御歌といふべし。」と言う通りである。前に、当時の遁世者の自然観について、と言つたが、西行・俊成の時代に先だつ二百年の昔から、事態はすでに此の通りであつたのである。

〔「色香をば」以下五首は、過去の日本に於いては、仏教徒によつて自然美への愛着が禁忌された事を実証する目的で、掲げる。それ等の歌が思想として、自然美への愛着を禁忌しつつ、文芸（表現）として、逆に熾烈な自然美への愛着を強くうたい上げたものである事実は看過し難いが、本稿の当面の問題からは外れるので、こゝでは触れない。〕

梅の花なに匂ふらむ見る人の色をも香をも忘れぬる世  
に

これは大式三位の作で、同じ新古今・雑上に「上東門院世を背

き給ひにける春庭の紅梅を見侍りて」と題して收められたものである。詳解に、「人は遁世して、世の中の色や香などは忘れられたる世に、梅の花は誰に見せむとて、なほ、かく色香美はしく咲きたる事ぞといふ事にて、上東門院の出家遁世せられしを惜しむかひなき心より、無心の梅花をいぶかりたる情にて、つまりは、院を惜しくなつかしく思ふ情なり云々。」と言うのが、極めて適切な解であると思う。前の歌と同様、遁世者は自然美からは全く遠ざかるのが常であつた、ということを知るために掲げたものであるが、この歌自体が、親しい人の遁世を惜しむ気持の表現であり、従つて非仏教的なものを内に持つものであることは、ついでに注意を要すると思う。

棄つとならばうき世を厭ふしるしあらむわれには曇れ

#### 秋の夜の月

同じく新古今・雜上に見える西行の歌。題知らず。自分はもう遁世者であるからには、月の美などに動かされて官能の悩乱を覚えたくはないから、月よ私のためには曇つて見えないようにしてくれ、という気持で、遁世者の心はこのようなものであるかと、考えさせられる一首である。

月を見て心浮かれしにしへの秋にもさらにめぐり逢

#### ひぬる

同じ人の作で、前の歌と同時の連作かと思われているものである。一首の意は、今宵は美しい月を見て思わず心を動かされた、在俗の昔は秋の夜の月に心浮かれる身であつたが、現在は修行にいそしんで、そのようなことも無いつもりであつた、ところが、

今この体たらくは、遁世者としての自己の未熟のせい、かと思われ  
る——、であつて、此の場合も自然美は、いたずらに遁世者の心を動かすものとされている。

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれ眺めてけりな恨め

#### しの身や

同集同部。慈円の作。一首の意は古く美濃の家苞に、「咲る花に心のとまれるを、あるまじきことと思ひかへして、花はいかばかりおもしろく咲にほへりとも、さもあらばあれ、世をすて、柴の庵に住む身の、心をとむべき身にはあらざるに、はかなくながめてけりなといひて、花に心をとめし我身を恨みたる也」という通りである。評釈が言う通り、いかにも「適切な解」である。ところがどうしたことか尾張はこれに対し、「みな誤解なり。○三ノ句は、よししかするにせよといふ意、柴の戸に匂はん花をながむるはよしながむるにもせよ也。こゝに浮世のことに物おもひをして空をばながめじとおもふにといふ事をそへてみるべし。三ノ句の語勢と四ノ句の語勢よりいでくる意はへ也。四ノ句は物をおもひて空をながめし事哉と歎きたる意、五ノ句は、さてもくちをしき我身よと歎きたるこゝろ。上句と下句との間に何とかや詞たらぬこゝちす。○もし正義をえられたらん事は、三四ノ間にそへてみる詞はたやすくうかび来るわざなるを、誤解せられたる故ことはたからず。又うらめしの身やといへるも此歌にはいかなるいひさま也。○一首の意は、柴の庵の花に心のとまるほどの心はどうでもよいが、うき世の事に物をおもふ、さてく／＼にが／＼敷事ぞと也。うらめしは慨字の義にあたる。」と言う。これは

反つて誤解である。何故尾張がそういう誤解をしたかというに、それは我々がこゝで問題にしている遁世者の自然観なるものに対して無理解であつたことが、主な理由であると思われる。

遁世者の自然観なるものの眞実の所を、一応了解した上で考えてみなければならぬことは何であるかというに、それは俊成の「今はわれ」の一首の中の「吉野の山の花をこそ」という表現のデリカシーである。前掲評釈の説は完全に見落していると思うのであるが。評釈の説の立場からは、成程俊成が自然美をも厭離すべき遁世者であることはわかつたが、それにしても彼は歌では、今こそ吉野山の櫻を我がものとして賞美しようと言つてゐるではないか、それをそう解釈することさえ許されないのか、という反問が予想されなくはない。それに答えてみたい。

評釈は、この歌を、今まで憧れとしていた吉野山の櫻を、わが宿のものとして見られる時が来た、という風に解し、いわば喜びの歌であるとして見ているのであるが、それは「宿のものとも」を余りに重く見た為の誤解であると思われる。言つてみれば、櫻を自己のものとして独占的に賞美する、と言つてゐるのである、という先入主に捉われた所が見える。この歌の調べを味わうと判ることであると思うが、吉野山の櫻なるものは、かねての憧れの的として今こそとびついてゆく対象ではなく、正に遁世者として最後のより所と頼み得る唯一の客体なのである。これを今は思う存分味わおう、というのではなく、これをこそ自分は唯一の友として心を慰むべきである、というもののようである。今はもう自分

は吉野の山の花をこそ我が宿のものとして見るべきであつた、という詠歎は、それ以外に心を慰めるものはない、という氣持からのものである。

俊成の歌には、世を通れた人に特有の悲哀感が籠められている。元来仏教の本旨とする所は無執着である。何ものをも捨てて、言いかえれば人世のあらゆるものから自己を隔離して、自己の觀念的自由を得ることであつた。ところが、いわゆる遁世者の中の或る人々——それが遁世者の中でもこのような哀れな歌の数々をわが文芸史上に残す人々であつたが——はそのような事には堪へ得なかつた。俊成の歌が、すべてを捨ててたゞ花に命をつなぐという底のあわれな遁世者の感懷であることを知るためには、またこれと同じ境地をうたつた他の一二の作を味わつてみる必要があるようである。

山里は人來させじと思はねどとはるることぞ疎くなり  
ゆく

これは新古今・雜中に見える西行の歌で、憂世を離れて仏道に専念する人の寂寥を、見事にうたい上げた佳作である。評釈に曰く、「〔釈〕我が住む山里は、人を來させまいと思ふのではないが、人に訪はれる事が、おのづからに疎くなつてゆく。〔評〕人をつつでもなく、待たぬでもなく、人を忘れたでもなく、忘れぬでもない心である。さうした心の靜かな揺らぎが、かうした歌となつたのである。都にあつては、歌が歌の為のみのものとなつてゐた当時、山林にあつて、歌を生活の為のものとしてゐた作者を思はせるものである。極度に實際に即した歌である。」と。すべて

誤りであるというのではないが、此の歌の背後にある環境の歴史的事実は、殆ど全く見落されていると思う。實際この歌に表現されているのは、遁世者の中の心ある人の胸にきざした痛切なる人間思慕の感情である。それは断たんとして断ち得ざる執着であつて、「人を待つでもなく待たぬでもなく」とか「人を忘れたでもなく忘れぬでもない」とかいうようなものではない。言葉にそう表現されてはいるが、その奥には哀切なるものが内在せしめられているのである。當時に於いて遁世なるものが、本来は人生のすべてからの自己隔離であるべきであつた歴史的現実を知つた上でなければ、了解し難い境地である。西行のこの歌のよさは、「人來させじと思はねど」のあたりにある。人とは絶対に会わないというわけではないが、遁世者の身ともなれば、訪う人も自ら絶えてゆく、という所に哀感がある。

さびしさに堪へたる人の又もあれな庵をならべむ冬の

### 山里

同じ人の有名な作品。一首の意は、評釈に「かうした寂しさに堪へてゐる出家が、我の外にもあつてほしい。あつたならば、庵と庵と並べて過さう、この冬の山里に。」という通りである。この歌は二重の意味で大切である。その一は、これが遁世者のきびしい孤独の在り方を想像せしめるよい資料であることであり、その二は、これが精神としては非仏教的なものであることである。前者については言うことは無い。後者については『中世草庵の文学』（石田吉貞著）の次のような一節が、我々に思索のヒントを与える。曰く、「世を捨てるといふことは、独り住むといふこと

と同義である。世を捨てることが修道上に必要であるならば、独り住むことは必然的に修道上の要諦でなければならぬ。されば敬日上人は、遁世者に三の口伝があるとして、一には同宿を禁じ、二には同体なる出家者の庵を並べて住むことを禁じ、三には一時に生活を全く改めることを禁じてゐる。（一言芳談）即ち独居でなければならぬだけでなく、同行者が庵を並べて住むことも、良からぬこととしてゐるのである。釈摩訶衍論の中には、『一室に二人とも住むべからず』と言つてゐる。かかる点から言へば、平家物語に、祇王祇女等が三四人で住んだとあるのが、草庵生活の本旨に合はないだけでなく、『庵を並べん冬の山里』と詠んだ西行の求めも、亦眞の草庵者の心ではない筈である。」と。若しこれが事実であるとすれば面白い。遁世者の作品として人をあわれと感ぜしめる歌は、本来の仏道修行者の正しい在り方から、一步逸脱した所にその眞価の生ずる所以があるということになる。もちろん、仏教なるものは歴史的に成長するものであるから、その逸脱したというのも、一つの仏教の在り方であると思われるかも知れぬ。が、こゝではそうは見ないで置く。遁世者のあわれなる歌のあわれなる所以が、非仏教的なる方向に求めらるべきであるというのは、注意すべき事実であると思うのである。

我々は右の二首から、第一に、いわゆる遁世生活なるものが、元來すべてのものから自己を隔離せんとするものであり、第二に、それが天賦の詩情に恵まれた人達にとつては堪えがたきものであり、そこに友を呼び、若しくは何ものかをより所として求めざるを得ぬものがあつたことを知らされる。これは、俊成の歌を



眞実に味わう上には、必ず知つていなければならぬ大切な事がある。俊成の「今はわれ」は「吉野の山の花をこそ」に重点があるのであつて、「宿のものとも」は、いわばそれに軽く添えられたものであると思う。それは櫻を独占するというのでは決してなからう。この歌として最も重要な「吉野の山の花をこそ」：見るべかりけれ」という表現であらわされたものは、今や自分は一介の遁世者となつて、このような非情のものを唯一の友とするのだと、自分で自分に言いきかせる一遁世者の歎きであると思ふ。

俊成の歌について、評釈が「詳解は『遁世の心哀れにこもりたり』と評してゐる。遁世の心も見えず、その哀れもなく、反対に喜びの心を見せてゐるものである。」と言つたのは確かに大きな誤解である。事實は反対に詳解の言う所が正しい。實際此の歌の生命は、この歌が遁世者の作なるが故に有する独特の哀感にある。その哀感なるものは、西行の「心なき」の歌の所で述べたように、作者が出家者であり、いわば宗教的存在であることよりも、むしろ反対に、彼が完全に出家者・宗教的存在ではあり得なかつたことに、由来すると思ふのであるが。

#### 四

年暮れし涙のつららとけにけり苔の袖にも春や立つらむ

同じ俊成の作で、前の「今はわれ」と同じ意味で問題になる一首であると思ふ。新古今・雜上に「入道前関白太政大臣家百首歌

よませ侍りけるに立春の心を」の詞書とともに收められている。本歌取りの歌で、本歌は古今・春「雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」である。一首の意味は、年の暮れるのを惜しんでこぼした涙が、袖一面の氷となつていたが、今日はとけたことである、わが苔の衣の袖にも春が来たのであらうか——。「苔の袖にも」は、わが法衣にも、で、一首はこれで知られるように出家者の詠歎である。

この歌で特別注意すべき語は何かというに、それは「苔の袖にも」の「も」である。本稿の最初に、文芸論なるものは、それが眞実に文芸論である為には、作品の表現のデリカシーに迫る底のものでなければならぬ、と述べて置いたが、こういう場合、「も」の一語にこもる深い意味を味わつてみる必要があると思う。幽玄なるものは、所詮歌の表現に関する事ならなのである。本稿はこれまで、幽玄なるものの本質が、案外に非宗教的であることを、一通り述べて来た。宗教的とか非宗教的とか言つても、本稿はいわゆる宗教論を敢えてしてゐるのではない。我々のいわゆる幽玄が歌の表現に関する事ならである以上、当然吟味すべき点がある。それを文芸論としてまさしくあるべき程度の綿密さを以て論証して来ただけのことである。幽玄なるものが本質的に宗教的であるか非宗教的であるかの論の如きは、逆に、この歌の「苔の袖にも」の「も」というようなはかない表現の吟味を通じて、いわば文芸学的に決定されなければならないと思ふのである。

俊成は何故「苔の袖にも」と詠んだのであらうか。それは遁世の身を大切にすることである。「苔の袖にも」の「も」は、「心

なき身にも」の「も」である。「何々にも猶」の意味の「も」である。今は遁世し一途に仏道に精進し、官能的なるものすべてに心をひかれる筈のない身ではあるが、という自覺の程を示した上で、さてその身にも春は訪れたことであると詠歎したのである。蓋しこの歌は、前掲「今はわれ」の一首とともに、いかにも俊成の歌らしい歌である。これを評して何といえよいかというに、「今はわれ」の歌に対する詳解の、「遁世の心哀れにこもりたり」の一語が、此の歌に対しても最も相応しいと思われる。その哀れなる所以の表現の眼目が、「袖にも」の「も」であると考えられる。もし然らば、この「も」によつてもたらされた所のもは何であるかというに、宗教的というよりむしろ逆に非宗教的と言われるべきものであると思う。我々の宗教に対する認識の如何に拘らず、「も」の一語によつて含蓄されるものが、そうでなければならぬと思うのである。

平安の末期から鎌倉室町時代にかけて作られた、幾つかのあわれなる歌のあわれなる所以が、その宗教的環境に由来することは事実である。そこにそれらの歌が「宗教的」と称せられる所以もあるのであるが、その宗教的環境に由来するということは、常識的に予想される所とは意味を異にするのである。それらの歌の作者の、そのいわゆる宗教的環境に対する在り方は、眞実のところ決して反宗教的ではないが、まさしく非宗教的なのである。それらの歌の主要な作家の表現に即して言えば、「心なき身にも」とよまれ、「苔の袖にも」と歎ぜられる所のものなのである。

いわゆる幽玄なる歌のすべてが、嚴密な意味での宗教的環境に

於いて成立したわけではないが、幽玄といわれる歌の在り方が、中世——この場合平安末期を含めて——という一大環境の宗教的性格に由来するものであることは事実である。そこに幽玄が概括的に宗教的なるものと考えられる所以もある。而も幽玄といわれるものの中で重きを占める、遁世者の作なるが故の哀感というものについて言えば、それは我々の予想に反したものである。幽玄が或る意味で「物のあはれ」の展開であり——はつきりそう言えない面もあると思うが、暫く常識に従う——その「物のあはれ」と幽玄との關聯について更に考究すべきことの多い事は、前に指摘して置いたが、今仮りに幽玄は「物のあはれ」の中世的な在り方であるとするならば、その「物のあはれ」の中世的な在り方であるという事は、次のように了解されなければならないと思う。すなわち、曰く、幽玄なるものは、いわゆる「物のあはれ」が、中世の宗教的環境に於いて深化せしめられたもの、というようなものではない、それは「物のあはれ」が、中世の宗教的環境に於いて——この場合「心なき身にも」乃至「苔の袖にも」という表現が示すように——尙且つ執拗にその存在を主張した所のものである、と。

俊成の「年暮れし」の歌は、いわゆる本歌取りの歌である。本歌取りなるものの文芸學的意義については、別の機会に更に詳しく考えてみたいと思うが、本稿の主題の關する限りで言うなら、それは「物のあはれ」（或る意味では王朝的詩情といえるもの）の、中世の宗教的——一般に封建的——環境に於ける、執拗な存続の仕方であると見られるのではないかと思う。内容的に言え

ば、王朝の抒情が中世という世界に取り入れられて、人情の美が維持せられたとでもいうべき所であろうが、それが表現としては、本歌取りというような形式を生んだものであると思うのである。俊成の歌の場合「年暮れし涙のつらとけにけり」は、一つの空想であつて、それだけでは到底了解出来ぬ性質のものである。たゞ人は古今集の有名な歌を想起して成程と感歎するのである。この歌は「苔の袖にも」という表現もよいが、一首の本歌取りの技巧がすばらしい。古今集の「雪のうちに」は、問題の多い歌で、人によつては、后位を停められて謹慎の中にある作者の歎きが寓せられていると考える人もあるが、何れにしても王朝のみやびを思わせる一首である。こういう境地は中世のいわゆる宗教的環境には元来そぐわないものであるが、俊成の歌の場合に限つて、それが実に巧みに調和せしめられている。「苔の袖」とい

う、本来は非人間的な環境に、「鶯のこほれる涙」という言い方で歌人には親しまれている甘美なる抒情が、何らの矛盾も見せず調和せしめられている。調和せしめられている、といえば、両者はもと／＼親近性を持つたもののように感ぜられるが、実は本質的には異質のものである。調和せしめられている、と言つたが、ほんとうを言えば、奇しくも同居せしめられているのである。普通に幽玄といえど何か宗教的なもののように考えられているが、肝心の歌の分析からは、逆の結論が導き出されるのではない、というのが本稿の狙いであるが、一首の歌の表現に於ける、宗教的なものと、非宗教的なものとの取合せは、かくも複雑微妙である。この種の歌を取扱い、この種の問題を論ずる者のデリカシヤが要求せられる所以であると思うのである。

(昭二六・五・一四)